

学会賞 授賞式

2026 年 7 月 15 日（水） 16:30-17:00 第 3 会場 | パシフィコ横浜 ノース 1F G2

AW

JSGS Art of the Year 2026（手術部門）

外科切除検体から紐解く消化器癌転移の分子機構と創薬への展開

神田 光郎¹

1:名古屋大学大学院医学系研究科 消化器外科学

このたびは、JSGS Art of the Year 2026（学術部門）という大変名誉ある賞を賜り、調憲理事長、選考委員の先生方をはじめ、日本消化器外科学会会員の皆様に心より御礼申し上げます。

私はこれまで、消化器外科診療の現場で生じる疑問を出発点とし、臨床への還元を重視したトランスレーショナルリサーチを推進してまいりました。米国 Johns Hopkins 大学では、

高感度遺伝子変異検出法を応用した膵嚢胞性前癌病変の診断法を開発するとともに、膵上皮内腫瘍性病変の発生を司る初期遺伝子変異を明らかにしました。臨床検体から微量の癌由来遺伝子変化を高感度に検出する技術は、その後の研究の基盤となっています。

胃癌には腹膜転移、リンパ節転移、血行性転移という異なる転移経路が存在するにもかかわらず、遠隔転移症例は Stage IV として一括して扱われ、転移形式に応じたバイオマーカーや分子標的治療は未確立です。こうした臨床上の課題から、「転移形式ごとに固有の分子機構が存在する」との仮説を立て、外科切除検体を用いた転移形式特異的 transcriptome 解析を行い、腹膜播種および肝転移に関連する新規バイオマーカーを同定し

てきました。その成果として、血行性転移胃癌で高発現する受容体タンパク NPTXR を発見し、抗体医薬の開発を経て海外企業とのライセンス契約に至りました。

さらに、腹膜播種に特異的に高発現する SYT13 を標的とし、架橋型人工核酸 AmNA を搭載したアンチセンス核酸医薬 ASO-4733 を創製しました。腹膜播種モデルでは腹腔内投与により播種形成を著明に抑制し、生存期間の延長を確認しました。GLP 非臨床安全性試験では臨床推定用量の 50 倍域まで忍容性が示され、令和 7 年 5 月には第 I 相医師主導治験を開始しました。今後は膵癌をはじめとする他癌種への展開も視野に入れています。

外科医が切除検体から見いだしたシーズを first-in-human へと橋渡しするまでには、多くの困難がありました。しかし、癌の不確実性と日々向き合う外科医だからこそ見いだせる発見があり、それを患者さんへ還元することこそが外科医研究者の使命であると考えています。まだ道半ばではありますが、本賞を大きな励みとして研究をさらに発展させるとともに、次世代の消化器外科医が研究に挑戦できる環境を築き、その道を切り拓いてまいります。

ます。